

声および多発性運動性チックである。Kはよく吐く子で、十分甘えさせられずに育った。幼稚園後半になり鼻、目、足、音声等のチックと夜驚が出現した。小1の2学期にチックが増強したためX年10/31受診した。治療は患児の希望で母子同席で行われた。I期は母の安定、Kの箱庭や描画における攻撃性の表出が見られ、チックはほぼ消失した。II期はI期で箱庭や描画で表した攻撃性を、プロレスやボール投げ、バッティングなどの身体的なプレイや人生ゲームで勝つことを通して確認し育てていった。

【考察】前思春期男子は、ギャングエイジと言われていようにある程度攻撃性を出しつつ成長していく。症例Jは、遊戯療法で今まで出せなかった攻撃性のある程度社会化して表出することができたと考えられた。症例Kは、これからギャングエイジに入るところであり、治療経過で母子関係の安定、さらに攻撃性の発揮が見られ始めたところである。今回はチック症児の症例2例の遊戯療法過程を述べたが、演者は病態を問わず、攻撃性を出すことに問題を持つ前思春期男子の治療において遊戯療法には以下のような効用が認められると考える。①遊戯療法は自由にして保護された空間を提供し、患児が攻撃性を出しやすくする。②遊戯療法では身体を通して攻撃性の現実検討を高めうる。③治療者に身体でぶつかっていき、言語的に洞察できない内容を身体レベルで体験していくことができる。

2) 女子トライアスリートにおける心理的コンディショニングと競技成績

—1994 ジャパンカップ・トライアスロン・イン・佐渡大会の調査より

高橋 邦明・小池 智子 (佐渡総合病院)
長島 清 (精神科)

ジャパンカップ・トライアスロン佐渡大会は、自分の限界に挑戦するという元来の意味を持つ A-type (228.195 km) と、オリンピック種目としての競技性を重視した B-type (138.5 km) という2つのコースで行われる。どんなスポーツでも、選手が大会において自分の力を十分に発揮するにはコンディショニングが重要である。コンディショニングには身体的側面と心理的側面があるが、心理的コンディショニングの指標として、最近 POMS (Profile of Mood States: 感情プロフィール検査) という心理検査が注目されている。そこで1994 トライアスロン佐渡大会に出場する女子選手134名に対し、競技

前に POMS を施行し、POMS と競技成績との関連を調査した。トライアスリートは健常群に比べて、D (抑うつ)、F (疲労) 因子が低く、V (活力) 因子が高い (t-検定, $p < 0.01$)、いわゆる凸型のプロフィールを呈し、競技前には自分を高揚させ、心理的コンディショニングを整えていた。競技成績との Spearman 順位相関係数 ρ は、A-type で D、F 因子と正の相関 (それぞれ $\rho = 0.509$, $\rho = 0.506$)、V 因子と負の相関 ($\rho = -0.500$) があり、競技前に抑うつ感、疲労感を残し、活力が弱い選手ほど成績を伸ばせないことが示された。しかし B-type では相関が見られなかった。(A+B) type では F 因子に $\rho = 0.464$ と正の相関があり、F 因子は競技成績と関連がある因子と考えられた。また、A-type で相関がある D、V 因子も競技成績と関連がある可能性が示唆された。A-type でのみ競技成績と相関があることから、身体的負荷が大きい時ほど競技前の心理的コンディショニングが競技成績に反映してくると推測される。年齢別、生理異常の有無、トライアスロン佐渡大会の経験の有無、今回脱落か完走かの比較では、生理異常 (+) 群で A (怒り) 因子が低く、佐渡大会の経験の無い群で T (緊張) 因子が高かった (t-検定, $p < 0.05$) が、他は差がなかった。年齢や、生理異常の有無、同じ大会の経験の有無という要素は、成績に関連すると思われる F、D、V 因子には差がなく、これらの要素は成績とは直接関連はないものと判断される。一方、生理異常 (-) 群では競技成績と F、D 因子でそれぞれ ρ は 0.805、0.897 と強い相関があるが、生理異常 (+) 群では相関がないことから、心理的コンディショニングが POMS に表出されにくい群があることも示された。以上より、選手のコンディショニング作りのひとつの指標として、POMS の各因子、特に F 因子が有用であることが示された。ただし感情・気分が POMS に表れ難い一群があり、ある選手に POMS を指標としてのコンディショニング作りが有効かどうかは、他の心理検査と組み合わせて判定する必要があると考えられた。

3) 小脳症状と精神症状を呈したプロバリン中毒の1例

田村 絹代 (五日町病院)
伊藤 陽 (新潟大学精神科)

プロバリン (一般名プロムワレリル尿素) は、現在は他の睡眠導入剤の普及により、医師から処方されることは少なくなったが、市販の薬剤として常用、乱用されて